

いづも  
喜んぞいなむら

松下昌義

# みちしるライト

## 目次

死んだらどうなる	三
四十にして惑わず	五
心の中へ光を	七
魂のおき処	九
感謝できる人と出来ない人	一
思いは力	一三
思いは返って来る	一五
手を合わす	一七
うらみをいだかない	一九
すべては変化する	二一
喜びを見出す者となる	二三
自分を光らす秘訣	二五
二人は一体となる	二七
魅力ある人	三一
孤独	三五
あとがき	三七

# みちしるべ

生きも、死んでも、私たちは神のものであります。—聖書—

## 死んだらどうなる

松 下 昌 義

「人は死んだらどのようなことになるのでしょうか」と、私に尋ねる方がよくあります。

そのような方は、おそらく、自分の死後について確かなものを持っておられないからお尋ねになるのだらうとおもいます。

私自身についていえば、自分の死後については確信を持ち、死後に対して希望に胸おどらせながら毎日を生きています。

最近、「人間死んだらどのようなになる」と言っただ類の本がいろいろ出ています。それらに共通していることは、死後の世界がこと細かに語られてあり、人々はそれを興味深く読みます。

それらの本の内容についての真偽はともかく、私はそれらに接する人々に対して、ある種の不安を覚えるのです。それは、死後の世界（それは霊界と言われる）に興味をもつあまり自分が生きている世界（これを現界と言われる）や自分自身についての鋭い洞察と責任と喜びとが、おろそかにされはしないかということです。

私たちにとって最も大切なことは、「今」を生

きる、ということです。

なぜ、「今」を生きる、ということが最も大切なのかといいますと、「今」をよりよく生きることで、とりもなおさず、死後の在り方を自然に決定するからです。

私たちにとって確かに在るのは「今」だけであり、昨日は過ぎ去ったことであり、もはや、自分ではどうすることも出来ません。また、明日は未だ私たちのもとには来ていないことであって私たちにはどうすることもできません。私たちにとって確かに在るのは「今」だけです。いうならば、「今」だけが、私たちの考え思いで自由に使えるのです。その「今」の連続が私たちの日々の生活であります。実に、私たちの人生とは、「今」の連続、「今日」の連続なのです。

ところで、ここに不思議なことがあります。それは、私たちにとってどうする事も出来ないと思っていた、「昨日」や「明日」ということを、「今日」という日をどのように生きるかということによって、自由に変えることが出来るということです。「今」をどのように生きるかが、明日をつくり、昨日を変えるのです。

「今」を感謝して生きるなら、昨日の不幸は消えてしまいますし、「今日」を喜びですぞすなら

きつと明日を希望の日として迎えることができましょう。

「今」「今日」をどのように生きるかということは、その人の人生の要かたみとなります。(要とは、扇おんぎのほねを止める釘くぎのことで、物事の一番大切なところのことを意味しています)

では、どのようにすれば「今」をそのように生きることが出来るのでしょうか。そのためには「今」を支え導き、支配したもう大生命の働きを、自分自身の身体と心にじかに実感することなのです。つまり、自分の「今」「今日」は、神さまが恵みとして、与えて下さった「今」であり「今日」なのだ、ということを確認することであります。

イエスさまは、死後の世界を誰よりもよく知っておられましたが、それについては特に多くは説かれないうで、むしろ、「今」をどのような思いで生きるかということが、如何に大切なことであるか、ということをお教へていただきました。

次のイエスさまの御言葉もその一つです。

「あなたがたは、明日のことでは思い悩むことはいりません」  
「あなたがたの天の父(神)は、あなたがたにとって必要なものが何であるかをよく御存じです。ですから、先ず、神の国(神さまの愛の働き)と神の義(神さまが私たちを絶対に裏切らない正しい働き)とを求めなさい。そうすれば、すべてあなたに備えられます。だから、明日のことまで心配して思い悩むことはいりません。明日のことは明日自らが思い悩んでくれるでしょう。(あなたの昨日も、今日も、明日もすべてつかんで支配してお出でになる神さまが、必ず、あな

たの為に、最もよいようにしてくださる)。だから、その日々の苦勞は、その日だけで十分である。(だから、あなたは、神さまの愛の働きを信じて、今と言う時、今日という日を一生懸命に生きなさい)」

—マタイ福音書六章二五節—三四節—

今、若い頃に読んだ佐藤一斉の「言志後録」の言葉をおもいだします。「一の字、積せきの字、甚はなはだ畏おそるべし。善悪の機きも初はじめ一念に在り、善悪の熟じゆするも積せきの後に在り」。

私の思いで解釈するならば、「一の字」とは、「今」「今日」ということです。「積」とはつもるということですから、「今」「今」という日々のことでしょう。また、「一念」とは、「今」の私の「念」です。結局、「今」「今日」というその時をどうように生きるかが、私たちの過去も未来も、果ては死後までも決定するということです。

過ぎ去った事について悔いもありましよう。また、将来のことについての心配もありましよう。さらに、死後のことについての不安もありましよう。しかし、「今」「今」を支え導いてくださる神の愛に自分自身が生かされていることを確信するとき、過去や明日、また死後について、とやかく思い悩み、どうなることかと案ずることは馬鹿げていることに気が付くのです。過去は感謝、明日は希望、死後は安心となります。有り難いことであります。



# みちしるべライト

求めなさい。そうすれば、与えられる。 — イエスの言葉 —

## 四十にして惑わず

松下昌義

考えや思いが、その時の気分や状況によってころころと変わる人がいます。自分中心の都合主義と申しましょか、無責任な者と言いましょかまた、節操が無い人と言いましょか、さらに、軽薄な人間と言うべきでしよか、とにかく、そのような者は、多くの人の信頼を失ってしまいます。

また、すぐに、燃えあがり、情熱を滾らすのですが、間もなく、冷めてしまふ、という者もいます。「ほら、ほら、また、始まった。今度はいつまで続くかしら」と、人々は冷笑しつつ、そのような者を眺めます。

さらに、なにごとに対しても、疑ってばかりいる者がいます。「私は、どんなことも、どんな人も信じませんよ」とその人は言います。このような方には友と呼ばれる人を得ることは出来ません。このように、心が定まらない人について聖書は次のように語っています。

風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。そういう人は、神から何かをいただけること

思っではなりません。

心が定まらず、生き方に安定を欠く人です。

— ヤコブ一、五 —

結局、そのような人は、自分の心が定まらず、生き方に安定が無く、最後には、折角の人生を全く無意味に終わってしまふ、というようです。

私たちが、自分の人生において、最も恐れねばならないことは、折角の人生を無駄に使ってしまふ、ということですよ。

× × ×

私たちの身体は日に日に成長します。背丈は伸び、体重は増え、力はまし、いろいろな能力は発達いたします。それと同じように、心、精神、魂も成長しなくてはなりません。

「成長」と言うことは、「変化」ではありません。「成長」ということは、一筋の道を進んで行く、ということだと思います。「変化」とは、進むのでなく、あっちへ行っただかと思つと、すぐにこっちへ来る、かと思つと、そっちへ行つてゐるというように、心が定まることなく「うろ、うろ、している」ということです。

ところが、私たちは、「うろ、うろしている」と、つまり「変化」していることを、「成長」していることだと思ひ違いしてしまひます。

成長とは、一筋の道を進むことなのだ、ということをもう一度しっかりと知っておきたいとおもいます。

イエスキヤマがお示しになった有名な御言葉の一つに  
心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

とあります。ここで言われる「心が清い」とは、一筋の思いで、一筋の道を進んで行く、というような意味が込められているのです。

「子曰く、吾れ十有五にして学に志し、三十にして立つ。四十にして惑わず、五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲するに従い、ても矩を踰えず」という言葉が論語にあります。

これは、孔子が自分のことを語ったのだかどうかはともかくとして、彼は、三十才で立ち、四十才で惑わず、そして五十才で天命を知る、と語っています。

思いますに、三十才で立つとは、人間だれでも、三十才代になりますと、二十代の時とちがって、少しは自分や自分の周囲のことが見えてくるようになります。ただ、熱情に任せ向う処を見ずして突っ走る、ということとはなくなりません。

「そうだ、よく考えて、自分の道を歩まなくては」と思うようになります。そのように思い、考え、気付くことが「三十で立つ」ということなのでしょう。また、四十才代になりますと、自分の人生の生き方の方向が段々と固まってきて、

「そうだ、私は、この道を、この思い、考えて、進もう」と大体の自分の方向と道筋とがきまるものです。これが「四十にして惑わず」ということではないかとおもいます。

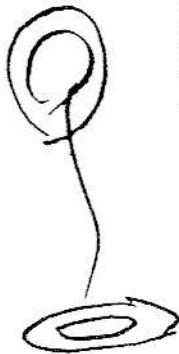
三十になっても、四十代になっても、さらに、五十代になっても、あれへ、これへと心定まらず、趣味と称し、教養と称し、加えて、老化の防止、惚けの対策と言って、わけも分からず、あれこれとその興味の対象を変え、自分では何一つ心に定まるものを持たないでいるならば、死んでからも迷い続ける者とならないとは、誰も言えません。

「水のごとく信じさせ給へるか、尊し、尊し」とは、日蓮の言葉だそうです。よい言葉だと思えます。それは、「火のごとくに信じる」のではなく、落ち着いて、鋭く物事を見通し、誰にも、何ごとにも惑わされず、深い愛情を持って、一筋に歩み続けて行く生き方、のことです。そのような生き方を「水のような火」と言った方があります。

心の清い人々は、さいわいです。

その人たちは神を見る

本当に、そのとおりでとおもいます。



# みちるベライト

神がまず私したちを愛して下さった — 聖書 —

## 心の中へ光りを

松下昌義

人から一筆求められると、その方はいつも次のように記します。「信じて疑わず、望んで屈せず愛して止まず」と。その方は、この生き方を聖書から学び、自らそのように生きておられます。

神さまを信じ、神さまに望みをいただくことが出来る者は幸いです。「愛して止まず」とは、神さまを愛し通す、ということでもあります。むしろ、神さまが、このような私であっても、愛しつづけて下さることが止まない、ということなのだ、と、語ってくれました。

わたしたちの人生は、嬉しいこと、楽しいことばかりが続くものではありません。よく考えてみますと、楽しいことよりも、辛いことや悲しいことの方が多くにおもわれます。

ですから、私たちの心の内には、さまざまなお痴、不満、恨みなどが一杯詰まっています。いつも人知れずその思いがくすぶり続けています。

表面的には、とても穏やかに見える人でも、心の奥には、夜叉のような思いが渦巻いています。

× × ×

私たちは、自分の心の内にある思いを語りません。それは、語る相手がないから語らないのです。付き合い合ふ人は沢山いても、心の内を語り、その思いを共に分かちあえる人という者は、そう多くはないものです。

それにしても、思いというものは、形も重さもないのに、それを、自分の内に溜めておくと、形や重さがあるのと同じように、胸につかえ、腹ふくるるを覚えます。考えてみますと、思いとは、とても不思議なものです。

× × ×

嬉しい思いが溜まって来ると、心に喜びが満ち、誰かにその思いを語りたくなります。「ちょっと聞いてよ」と言って語りだし。聞いてもらって、すーっとして心が落ち着きます。

このことは、苦しさにおいても同じです。苦しい思いを自分の内に溜めっていると、胸が苦しく、腹がにえくりかえるだけでなく、気が狂わんばかりになると共に、身体にも変調が出てきて、ついには、胃に穴があいたり、心臓に異常を来たしたりいたします。

× × ×

イエスさまは、わたくししたちに、とても大切なことを沢山おしえて下さいましたが、その一つに、

私たちが思ったことは、実際に行なったことと同じである、ということですが、これについては、新約聖書のマタイによる福音書五章二十一節から二十八節までを、是非とも読んでいただきたいと思えます。

「形は、思いの固まりである」とは、いつも私が言っていることですが、その反対も真実であって、「思いが固まること形になる」のです。

「神は、初めに、天と地とを創造された」と、聖書の初めに記されてありますが、それは、それは神さまの愛の思いが固まり、形となって天と地とが出現したということでありま

す。したがって、創造されたもののどれ一つとして、神の愛の思いによらないものはないのであります。

× × ×

とにかく、思いということ、ただ思うただけ、と言うことではなく、思いは形になるのだ、ということをし、っかりと知っておきましょう。

「思うだけだから、誰にも分からないし、実際に人に影響

を与えるわけではないのだから、何を思っかまわらないだろう」などと考えるはなりません。

思うことは、実際に行なったのと同じほかに、自分自身にも人に対しても影響力をもつのだ、と言うことを、もう一度し

× × ×

いつも自分の内に、暗くて、冷たくて、汚い思いを持たねば生きて行けないのが、この「私」という者です。自分自身を汚し、人を汚して生きているのが、この「私」です。

そんな「私」であっても、「心配しなくてもいいですよ」とイエスさまは語りかけてくださいます。

「私は、戸口に立って、叩いている、だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるならば、わたしは中に入ってその者とともに生活する」と、イエスさまは言っておられます。

暗い部屋のカーテンを開けると、暗さが消えて無くなり光りが部屋に満ちるように、イエスさまを自分の心に迎える時、暗い「私」の心も清められるでしょう。

「信じてうたがわず、望んで屈せず、愛して止まず」。さあ、イエスさまを自分の内にお迎えする思いをもって、天を見上げて、大きく息を吸い込もう。



# みちしるベライト

わたしを信ずる者は、わたしが行う業を行う

— イエスの言葉 —

## 魂のおき処

松下昌義

「自分の居場所がない」ということは、とても悲しいことであり、不安なことです。

自分の家の中に、自分の居場所がなければ、それは、「自分の家」とは申せません。自分が、安心して居ることが出来る家であるからこそ、そこが「自分の家」なのです。

「自分の居場所」とは「自分の身の置き処」ということでもあります。

「まったく困ってしまつたよ。だって、自分の身を置く処がないんだもの。参つたなあ」などと人から聞くことがありますし、また、自分も言つたりいたします。そのような処へは、二度と行きたくありません。

仕事を終えて帰途につくとき、歩きながら、ふと、思うのです。「帰るべき家が自分にあるということは、何と有り難いことであらうか」と。

もし、「自分の身を置く」ことが出来る家がなければ、何時までも、あてどなく歩きつづけなければならぬ。それは、とても不安なこと、悲し

いことであるに違いないと、思うのです。それが、寒い冬の夜をあてどなく歩き続けなければならぬいとすれば、その悲しさ、寂しさ不安は一入大きいことだろうと、思うのです。

「窓際族」ということが一時よく聞かれました。それは、会社などで、必要とされなくなった人のことを指す言葉であることは、説明するまでもありません。

責任ある仕事も与えられず、場合によっては、ほとんど仕事らしいことをさせて貰うことなく会社に居るということは、まさに「自分の居場所」「自分の身を置く処」がないので、その苦しみは「身のちぢむ思い」であり、「どうしてよいかわからない」不安なことでありましょう。

「ただいま」と言つて帰ることが出来る「自分の家」があることは、何にも増して安らぎであります。明るくて、楽しくて、温かな家族が待つている自分の家がある、ということは、その人の生きることを支える力となります。まことに、「自分の居場所」がある人は幸いな人です。

イエスさまはあるとき、次のような不思議なことを、お語りになりました。

心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父（神）の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたのためにために場所を用意しに行くと言わなければならない。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたを、わたしのもとに迎える。こうして、わたしの居る所に、あなたもいることになる。

イエスさまは、「あなたがたの為に場所を用意しに行く」といって下さいました。その「場所」とはどのような場所なのでしょう。それは、「私たちの魂の居場所」のことです。

わたしたちは、「自分の身の置き処」は熱心に求めても、「自分の魂の置き処」には無関心でいます。今、「あなたは自分の魂の置き処をお持ちですか」と、尋ねられて、「はい私にはあります」と、確信を持って答えることができるでしょうか。

魂とは、心であり、その働きを思いと言います。私たちの身体は、魂即ち心を抛り処にして在るのです。ですから、心即ち魂に安心がないと、身体も弱く不安定になるのです。

「元氣」とは、気の元がしっかりしていることです。元の氣とは、魂即ち深い心のことです。

自分の魂の居場所がないということは、その魂が迷い続けている、ということ。魂の居場所を持って居ない人は、

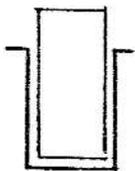
生きることの深い安心がなく、本当の自信がなく、つまるところ生きる希望がない人であり、本質的に不安を持っている人です。

若い間は、身体感覚の楽しみによって、魂の居場所がないことを、紛らわし、誤魔化すことができます。しかし、身体感覚の楽しみが薄らいで行くにしたがって、魂の居場所がないことの不安が現れ出てきます。気の元を持たない魂は元気を失い、自分の魂の落ち着くべき所がないので、悲しみ、苦しみ、おののきます。そして、生きても、死んでも、帰る所を持つことが出来ないで迷いつづけるのです。

イエスさまは、「あなたの居る場所を用意しに行く」と言い、そこへ「あなたを迎える」とおっしゃいました。

「わたしの居る所に、あなたも居ることになる」といって下さいました。まことに、有り難いことでもあります。

神の光り、命、愛、恵み、温かさ、優しさ、強さ、希望、喜び、平安が満ちる所。そこに、魂の居場所を持つ者は、幸いです。そのような者の魂は、死んでも生きても平安と喜びのうちでキリストと共に輝きつづけることでしょう。





まだ、他にもこんな人がいます。自分が好ましく思っている人とか、自分に利益をもたらす人などには、盛んに御礼を言う人です。

さらに、自分と同じ主義や主張、同じ信仰、同じ立場に立っている人に対してだけ御礼を言う人もいます。

さらに加えて、次のような人もいます。「私が御礼を言うのは神さまだけです」と言う人。

わたしは、はたして、御礼をいうことにおいて、どのような姿をしている者なのだろうかと自分を省みています。

×

×

×

先に紹介しました聖書の御話に、もう一度目を向けてみましょう。よく注意をしてみますと、イエスさまは、「感謝」つまり「お礼」ということについて、とても大切なことを、お語りになっています。それは、「私にお礼を言え」とは言うっておられないことです。また、「神さまだけに御礼を言え」とも言うてはおられません。

×

×

×

イエスさまはあるとき、幼子を自分のところに招き寄せ、「この小さき者の一人にしたことは、わたしにしたことである」と言われました。

神さまのお恵みは、神さまから直接に頂くこともあります

が、そのほとんどは、さまざまなる人、物、出来事、自然の働きのかずかず、などを通して、私たちのもとに与え注がれるのであります。事実、わたくしたちは、そのような方法で、多くのお恵みを日々受けて生きています。雨も太陽も風も空気も、親も友達もその他食べ物も、とにかく数えあげればかぎりがないその恵みのうちに生かされているのであります。

×

×

×

そして、時として、いやな事、悲しいこと、苦しいことさえ、神さまの恵みの贈りものであるのです。

私たちは、いつも自分自身の感覚や智恵や思いだけで「ありがとうございます」と言ってしまうのです。ですから、感謝すること、しないことを、自分勝手に選り分けてしまうのです。そのようなことは、自分の内に信念とか、教条とかを持って生きていく人には一層強いようです。

すべての事に、物に、人に対して素直になりたいと思えます。そのとき、イエスさまの御言葉がよく了解出来、神さまが下さるお恵みの数々が見えてきて、「有り難うございます」「感謝いたします」という言葉が、すべてに対して言えるようになるでしょう。そして、その言葉によって自分も他人をも光り輝かすことが出来るようになるでしょう。



# みちしるベイト

思わずらいは、何もかも、神にゆだねなさい — 聖書 —

## 思いは力

松下昌義

わたしたちはいつも何かを思っています。何も思わないでいるときはありません。ところが、不思議なことに、このような「思い」について私たちは改めて考えることがないようです。そこで、今月は「思い」について少し考えてみましょう。

× ×  
思いというものは、形もなく、響きもなく、したがって誰にも知られることがありませんので、わたしたちは思いというものを軽くとりあつかいます。それどころか、思いは野放し状態であるともいえます。何を思ってもおかまいなし、いうならば「無法状態」にあるのが思いなのです。

「今日は、お会いしてうれいす」と口では言っても、心の内で「嫌な奴に会ってしまった」と思っても、その思いは誰にも分からない。「まあ、お偉いですね」と言いつつ、「こんな馬鹿な奴はどこにもいない」と思っても誰にも知られることはない。「お元気で」と言いつつ、「こんな奴は死んでしまえばよい」と恐ろしい思いをもっている人も人に知れることはないのです。

× ×  
しかし、思いとは、それだけのものなのでしようか。いいえ。そうではありません。

× ×  
思いとは力なのです。このことは、いくら声を大にして語っても、言い過ぎるということがないほどに大切な事実なのであります。

× ×  
思いというものが、力であるということを経験してはいるのですが、そのことに気がついていないだけです。

たとえば、いつも自分がいちばん正しくて偉いと思ひ、他人を見下げ自分のことしか考えないような人に出会ったとしましょう。彼は、いつもの通り、腹立たしく、胸がむかむかするようなことを、ひとり捲くし立てて「それじゃまたナ」と行ってしまいました。さあ、あなたの気分はどうなるでしょうか。

あなたはきっと誰かに言われるでしょう。  
「今日は嫌な奴に出会った。今でも未だ嫌な思いが胸につかえていて、まったく気分が悪い」  
あなたは、その人の内にあつた「いやな思い」を、その人と出合い言葉を通して受けてしまったのです。

考えてみると、その人から身を感じるなにか具體的な暴力による攻撃を受けたわけではありません。

ん。つまり、後まで目に見えるような何かを受けたのではないのに、「いつまでも自分の内に残る嫌な思い」と何なのでしょうか。それこそ、出会った人の「思い」なのです。

相手の嫌な思いが力となってあなたの中へ入ってしまったのです。だから、それに拒絶反応を起こしたあなたの思いは気分を悪くし、何とかそれを始末しようと努力する。そのことが「胸につかえる」ことなのです。そして、誰かにそれを語ることによってようやく始末されるのです。

ですから、「アア、全部言っつとすつとした。これで胸につかえているものがなくなり、気分が落ち着いた。」と人は言います。

× × ×

思いは目に見える力以上にいろいろな働きをいたします。善い思いは善い働きを、悪い思いは悪い働きを他人に対しても自分自身に対してもするのです。さらに、善い思いは善いものに深く同調していいよ善くなり、周囲に善い思いを撒き、悪い思いは悪いものにますます同調して悪くなり、辺りに悪い思いを撒き散らすことになるのです。

悪い思いを自分の内に持っている人は、考えただけではなくその人の仕種や顔つきまでがそれにふさわしい悪に造り変えられてしまいます。そこでは、思いが彫刻の鑿の鋭さとそれをハンマーで叩き刻む力の働きをして悪の顔に造り変えてしまふのです。思いとはなんと恐ろしいほどの力をもっていることでしょうか。

また、思いはすべての物の中にしみ込んで行く力でもあります。ですから、家はそこに住む人の思いを毎日毎日浴びせかけられしみこませているのです。その結果、その家の雰囲気というものを醸し出すことになるのです。清々しさを漂わせている家には、必ず清々しい思いを持った人が住んでいます。いくら照明で明るくしていても暗い思いをもっている人が住んでいる家は、暗い思いが発散されていてすぐにそれを感じることができません。

× × ×

聖書を読んでいますと、思うことは行うことと同じであることが示されています。また、善き思いが神さまの愛をいただく只一つの方法であることも教えています。つまり、自身を神さまを仰ぐ信仰の思いでもって、善く管理することを勧めているのです。

どんな時にも感謝と喜びとをもって、神さまの御愛の方に自分の思いを全開し、すべてを委ねる者でありたいとおもいます。そのような思いを内に持っている、自分が知らぬ間に光り輝き、どのような悪い思いも外からは近づけなくなり、さらに、悪い者も清める者とされるのです。そのとき、本当の安らぎが自分を支配するようになるでしょう。



# みちるべライト

神はおのおのの行いに従ってお報いになる — 聖書 —

## 思いは返<sup>かえ</sup>ってくる

松下昌義

わたしたちは先の号で「思いは力」であることを学びました。今月も「思い」についてももう少し考えてみましょう。

× ×  
私たちはいつもいつも何かを思いつづけていますが、その「おもう」という漢字を字典で拾ってみますと、おもに次のようなものがありました。

「思」「懐」「念」「想」「憶」「意」「推」この他にもたくさんあるのですが、その理由はおそらく、私たちの「おもい」の内容が実にさまざまで、さらに複雑に絡<sup>かか</sup>り合<sup>あ</sup>っているわけですから、それを漢字で表現しようとするならば、数えきれないほどに「おもい」の漢字が生まれてくるにちがいありません。

これらの漢字を、上田万年氏の字典によって紹介しておきますと、「思」とは、だいたい人が「おもう」すべてのことをこれであらわしており、「懐」とは、人にしても所にしてもそれを思い慕うことであり、「想」とは、オモイヤルこと、「念」とは、自分の胸の中でいつまでもジツト思

いつづけて離さぬこと、「憶」とは、「念」とおなじですが、「念」は胸に持つことで、「憶」は胸に忘れぬこと、「意」とは、「想」と同じであるが、ものを推量<sup>すいりょう</sup>しツモリすること、「推」とは、思案、分別しておもい計<sup>はか</sup>ること、などとありました。

× ×  
とにかく、このように私たちの「思い」はさまざまであり、そのさまざまな思いを何時も何時も持ち続けて生きているということが、私たちの生活だといえます。

× ×  
その思いとは、力である、エネルギーであるということとは、先の号においても学びました。

「人の、一念、岩をも通す」ということわざがあります。また「一念の善悪を生殺す」ともいわれます。それは、ここにきざすちよとした善心悪心が、人を生かもしも殺しもする、という念の力をいったものです。そしてさらに、「一念の剛なるは世を累ねて通る」とあります。その意味は、人がもつ一念の強い力は、何代が後までも貫くものである」というのです。

このようにみてきますと、私たちが自分の内にいなく思いとは、なんと偉大であり、また、なんと恐ろしいことなのかと言うことがわかります。

しかし、私たちは、このように自分が生み出し、自分が持っている「思い」を、かくく考え、先の号でも申しあげましたように、まったく野放し状態にしています。実に、自分自身を管理するということは、自分の「思い」を管理することであると言えます。

それでは、次に、今月の学びにはいりましょう。

× × ×

みなさんは、自分の思いが「逆もどり」をして来るということをお考えになったことはあるでしょうか。

あなたが、誰かに対して思ったその「思い」は、あなたのもとに「逆もどり」して来るのです。

そんな馬鹿なことがあるものか、と言われるかもしれない。しかし、本当のことなのです。この事実を皆さんが、しっかりとお知りになるとき、きっと、皆さんは、自分の思いに、今まで以上によく気を付けて生活されるようになることでしょう。イエスさまが弟子たちを人々のところへ遣わされたとき、弟子たちが心得ておくべきこととしていろいろと教えを与えられました。その心得の一つとして次のように言われました。

その家に入ったら、『平安があるように』と挨拶をしなさい。家の人々がそれにふさわし

ければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平

安はあなたがたのところに返って来る。

— マタイ十章十二節 —

返って来るとは、逆もどりして来る、ということなのです。このところは注意深く聞く必要があります。大切なことは、思いを与える相手側において、考えないことです。

相手が悪くても善くても、私たちが与える思いは、いつでも、どこでも、同じく善いものでなければなりません。どんな時にも、相手の善悪に自分の思いを惑わされぬこと、であり、相手が悪く、こちらの祝福を受けない時は、その祝福は逆もどりをして来て、自分自身を祝福する働きをするのです。

さらに、気をつけなければならぬとても大切なことがあります。それは、もし、あなたが、あなたよりも思いの美しい人に対して、あなたが、悪い思いを投げかけるなら、その悪い思いはそっくりそのまま、あなたに逆もどりをしてきて、あなたを打つことになるということです。

× × ×

私たちは、どのような人に対しても、悪い思いを持ち、悪い思いを投げつけるようなことをしてはなりません。これはただの、「たてまえ」としてではありません。本当に、思いの世界は、神さまが管理されており、その構造には畏敬すべきものがあるのです。まさに、「神さまは、すべてを見ていらっしゃる」のです。



# みちしるベイト

いつも祈りなさい

— 聖 書 —

## 手を合わす

松 下 昌 義

世の中には、一生の間、自分で手を合わすことを、まったくしない人がいます。そういう人でも死んで棺桶かんぼくの中に入れられるときには、胸の上で手を合わせてもらいます。

私はいつもそのような人を見ていて、「生きている間に、自分の思いで自分の手を合わすことが出来たらよかったのに」と、とても残念に思います。

ですから、「死んでしまってから、他人様に自分の手を合わせてもらうようなことはするな。生きているあいだに、自分で自分の手を合わせなさい」と勤めることにしています。

× × 「手を合わす」ことは、世界のいろいろな宗教に於いてなされていることです。手を組むことも「手を合わす」ことの一つだと私は考えています。

一般に手を合わすことを「合掌がしやう」と言われています。合掌とは、両手をそろえて合わせ、心を集中し礼拝することです。このような合掌は、古

くインドで行われていた礼法の一つなのだそうです。その場合、右の手を聖なる手、左の手を汚れた手として使い分ける習慣があったとのことですが、その聖なる手と汚れた手とを一つに合わせることが「合掌」であるならば、「合掌」という行いには、人間の深い思いが込められているように思えて来るのです。

× × 素直すなまじに自分自身を省しるみると、自分の内には、聖い思いと汚けがれている思いとが一緒に住んでいることが分かります。そして、まきれもなくその二つの思いによって振り回されているのが、現実の「わたし」であり「わが身み」なのです。

ですから、「手を合わす」ということは、そのような自分自身であることを、正直まことまことに認めた姿なのだと言えないでしょうか。

× × 「このような自分です。よろしくお願いいたします」という心の現れが、「手を合わす」こと「合掌」することだと思ふのです。

× × このような思いが「手を合わす」ことなのだと思ふれば、それは、私たち人間だけが出来ることなのだと言えます。なぜなら、人間だけが、自分の本当の姿を見ることが出来るからです。動物たち

は、自分の本当の姿を省みることはできませんから、彼らは「手を合わせる」ことは出来ないし、知らないのです。ですから、手を合わせる事が出来ない人は、動物と同じだと言えるかも知れません。

それにしても、「手」というのは不思議です。手を持って  
いるのは人間だけです。手の仕様をよくよく観察しています  
と、手とは「自由」の象徴のように思えて来るのです。「あ  
の手で駄目ならこの手でいこう」「おくの手を使おう」……  
手を用いた言葉はたくさんありますが、「面白いのは「手」と  
いう漢字を「ひと」とつまり「人」とも読むということでは  
いずれにしても、「手」は人間の自由を象徴しているよう  
です。

その手を、どのように用いるかということは、その人に任  
されているのです。人を殺すために用いるか、人に親切を行  
うためにもちいるか、手というものは、その人の思いにより  
ます。

或る方が、とても興味深いことを記しておられるのを若い  
頃に本で読んだことを、今も覚えています。それは、千手観  
音を見ていますと色々な手があるが、最も大切な中心の手だ  
けは、手を合わせている。中心で手を合わせていることが最  
も大切なことである。と言ったことだったと記憶しています。

「手を合わせる」という姿は、「折り」の姿にはかなりま

せん。汚れた我が身であることに赦しを願い、イエスキリス  
トにおいて、神さまが我が身を愛し、赦して下さることを  
喜び感謝し、自分の内なる魂をますます光り輝かすために  
助けと導きとを祈る姿こそ「手を合わせる」ことだと思っ  
ます。

これらのことを一口で申しますと、「ありがとうございます  
す」と「よろしくお願いいたします」ということになりま  
す。

私たちは、とても弱い者です。なにごとでも自分の自由  
はなりません。肉体を持ち、この世に生きていかなければな  
らないわが身のうえに、襲って来るさまざまなことからはと  
うてい逃れることはできないものです。なにごとにも自由で  
あるようで、その実、とても不自由な者がわたしたちなので  
す。

しかし、それらの一切から、私たちが解放たれて自由に  
なれる術が人には与えられています。それこそ、「手をあわ  
す」ことなのです。

一念をこめて自分を神さまに向け、手を合わせ「イエスさ  
まよろしくお願いいたします。有り難うございます」と祈る  
とき、必ず神さまによる平安が、わが身の中から生まれて来  
ることでしょう。



# みちるべし

「悪の働きに、すきを与えてはなりません」

— 聖書 —

「うらみ」をいだかない

松下昌義

人の一生は重荷を負うて坂道を行くがごとし、と徳川家康が言ったそうです。確かに、人は誰もが背中に苦勞という荷物を背負っているだけでなくその胸の内にも、さまざまな思いを持って生きています。

さまざまな思いのなかには、一時的な思いもあれば、何時までも永く永く引きずっている思いもあります。

その場限りの思いというものは、比較的軽く跡形を残しません、何時までも引きずっている思いというものは、その人の生き方にいろいろと影響を与えます。

× × ×  
何時までも引きずっている思いのなかの一つに「恨み」という思いがあります。

「あの人が私にしたことは、今でも忘れてはいません。あれ以来ずしと私の心の奥にあって、思いつたたびに、わたしは限り無く腹立たしくなります。おそらく、一生の間わたしは恨みつづけるでしょう」などという言葉を聞くと、恐ろしくな

ります。まさに「怨念」という言葉がぴったりです。

× × ×  
このように、恨みということの特徴は、先にも言いましたように、その思いの継続性、つまり、いつまでもその思いを忘れずに自分の内に引きずり続けている、というところにあります。

× × ×  
どのような思いでも、自分の内に持ち続けていると、その人にとっても大きな影響を与えるものです。「塵も積もれば山となる」とあるとおりです。どれほど善い思いを一時的にもつても、持ちつづけた些細な悪心には、決して勝つことはできません。ですから、「習い性となる」とは、よく、そのことを語っています。「性となる」とは、その人の「根性となる」つまり、「性質になる」ということです。

× × ×  
恨みを持つことの恐ろしさは、恨みを持ち続けている、当の本人が最も強く受けるということです。その人の根性まで、性質まで、人格までが汚されてしまうのです。それだけではなく、その人の顔かたち、姿までが汚されてしまうのです。そして、その恨みの思いに、他のいろいろな悪が呼び集められて、いよいよ、その人を苦しみや不幸



# みちしるべ

わたしを強めて下さる方のお陰で、  
わたしにはすべてが出来ます。

— 聖書 —

## すべては変化する

松下昌義

すべてのものは、日々変化しつづつあります。その変化の様子は、ちょっと目にはわかりませんが少し時間をおいて見ますと、その変化がよくわかります。例えば、しばらく見ない間にその草や木の様子がすっかり変わっていたり、すこしの間に赤ちゃんが、以前に会った時とは見違えるほどに大きくなっていることが驚くということがあります。

毎日見ていると、その変化に気が付きません。しかし、確実にすべてのものは変化しつづつあるのです。万物は流転すると言った古代ギリシャの哲人ヘラクレイトスと言う人は「すべてのものは動いていて、なにもものもとどまっていない。人は二度と同じ流れにはいれないであろう」と言いました。

×  
×  
すべてのものが変化しつづつあるということに気がつくことは、とても大切なことであります。今日の自分が、明日も、明後日も同じように続くと思っているのが私たちです。しかし、事実はそうではありません。その証拠に、「いつのまにか

気がついたら年をとっていた」と、人が言うのをよく聞きます。私たちがそれに気づいても気づかなくても、年をとるといふ変化は確実に自分の身のうえで起こり続けます。この事実には気が付くときはじめに私たちは自分が生きている今の大切さを知るのでした。

×  
×  
「もう貴方も、十六才や十七才でもないのだから、しっかりと自分の将来のこともよくよく考えて行動しなくてはならないでしょ」と、忠告を受けている人がいます。しっかりと生きる、ということは、変化しつづつある自分をよく自覚して生きることだと思えます。

×  
×  
何時までも、夏が続くと思ひ、来るべき秋や冬の季節に備えることを忘れて呑気に歌い続けていた者の愚かさを、「きりぎりす」の姿に託してイソップはその物語を書きました。冬が来て慌てふためいても、どのようにも出来ません。ただ悲しむばかりです。

×  
×  
誰でも、自分自身のことは分かりません。自分の姿は、どのような人でも直接に見ることは出来ません。しかし、自分の外に自分の姿を見ることが出来ます。人や動物などの生きる姿に於いて、

また、自然の営みの姿に於いて、自分を見ることが出来ます。人の変化する姿、四季おりおりに移り変わる草木の姿、これらを通して、私たちは、自分をも含めてすべてが変化して行くことを知らされるのです。これは神さまが私たちに備えてくださったことなのです。

ですから、「見る」ということは、ただそこにあるものを映し取るということではありません。「見る」ということは、そこに新しいものを見出して行くことです。

川の流れを見て、そこに人生の無情の姿を見出した人がいます。また、花の散る様子を見て、人の果敢な姿を見た人がいます。さらに、若木を手入れしていて、すべて大切な人格の基本は、幼き時に躰けなければならぬこと、大きくなつてからは、最早どうすることも出来ないという知恵を見出す人もいます。

このように、ものごとをよく見る者になるということが「成長する」ということなのです。

「成長」とは「ものごとが変化する」ということをよく知っている者だけに起こりうるのです。

×

×

×

木や花、動物などの盛んなる姿に関心を向けるばかりでなく、それらが醜く枯れ、滅びへと変化していく姿に関心を向けることはとても大切なことです。変化するということには「美しく変化する」と同時に「醜く変化する」ということも含まれています。青年へと変化して行く人も、やがては老年

へと変化して行きます。そして、ついには、この世からその姿は消えてしまいます。すべてのものが変化するということは、この事実を語っているのです。聖書はこのことを「この世は過ぎ去る」と一言で教えています。

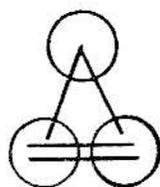
「この世は過ぎ去る」ということに気づくことは、この世を悲観的に見るということではありません。

この世の本当の姿に気づくことが「この世は過ぎ去る」と言うことを知ることなのです。自分や自分をとりまくことがらの本当の姿を素直に見る目を持つということが、「この世は過ぎ去る」ということに気づくことなのです。

「この世は過ぎ去る」というこの一点に気づくことによって、自分の思いを、過ぎ去ることのない平安へと向かわせる為に、私たちはこの世を生きているのです。

変化することを厭うのではなく、変化することを通して変化しない真実に目覚めさせられるのです。

「あなたがたはこの世では苦勞がある。しかし、雄々しくありなさい。私はこの世に勝っている」とイエスさまは申されました。変化して止まず、一切は過ぎ去ってしまうこの世に在って、変化せず、過ぎ去ることのない神さまに出会い、その命に自分が与かる福音をイエスさまは示してくださいるのであります。



# みちるべイト

感謝して受けるなら捨てるものは何もない 一聖書一

## 喜びを見出す者となる

松下昌義

この世のどのようなものにも、表と裏とがあります。それは不思議なことではなく当たり前のことであります。

ところが、「表と裏とがあるなんて、そのようなことを、わたしは絶対に許せない」と、怒りだす人がいますが、その人は、何か思い違いをしていらっしやるのではないでしょうか。

腹をたてて怒る前に、目をしっかりと見開いて自分の身の回りを眺めてみましょう。例えば、一日は明るい昼ばかりではなく、暗い夜もあり、それらを合わせて一日というのです。また、日が照りますと、その光りを受ける部分と光りを受けない陰の部分とが出来ます。一枚の紙も表にする部分と裏にする部分とがありますが、そのように在るということが物の姿なのであります。また、私たちの顔も笑っている時の顔と泣いている時の顔とがありますし、喜んでいる時と怒っている時とがあります。そのような姿が生きているということの印だといえます。

このようにみて来ますと、物事に表と裏という二面があることは当然のことであって、かえって表ばかり、裏ばかりということの方が異常なことなのだといえます。

それにしても、私たちは、表は善いこと、正しいことであり、裏は悪いこと、間違ったことなのだと思ひ込んでしまっています。

このような思い込みから、すべては表でなければならぬ。裏は絶対に許せない。という教条主義者、形式主義者などが生まれてくるのです。

こういう人は大体に於いて、軽薄な正義感の持ち主であって、直情的で、その内面と表情に人間的な豊かさを欠いているようです。

何事においても、ものごとが成り立つには、それ一つでは成ることは出来ません。二つ又はそれ以上のことやものが互いに補うことによって初めて、ものごとが成り立つのです。

昼は夜によって昼となり、夜は昼によって夜と成るのです。夜は悪でも善でもなく、昼も、悪でも善でもありません。夜は夜の役割があり、昼は昼の役割があるのです。その役割をはたすことによって、夜と昼とは互いに成り立っているのです。

ります。

このことを具体的に申しますと、夜は大方の動物と植物とにとつては休息の時です。そして、その休息の時を過ごしてこそ、それらのものは昼に活動が出来るのです。植物のその活動が空気を清浄化する作業の力となっていることを知るとき、どうあっても昼と夜とがなくてはならないということが分かつて来ます。

× ×  
表を善、裏を悪とするのは人です。夜を暗黒、昼を明白とするのも人です。人は自分で善と悪とを作る前に、どのようなもの、どのようなことの中にも善を見出すことをしなければなりません。

善と悪とを造る者は、結局、どのようなものにも、どのようなことに於いても悪を見出すことに熱心になってしまいません。

× ×  
見ても、聞いても、それを悪く見、悪く聞き取る人がいます。いつも批判する材料だけを捜している人がいます。また、悲観的にものごとをとらえることしか出来ない人がいます。そのような人には明るさがありません。顔の表情には険があり、薄汚さがたぐい、精彩を欠いて、周りの人に嫌悪感を与えます。それにひきかえ、見ても、聞いても、それを善く見、善く聞き取ることが出来る人は、どんな事柄からでも喜びを取り出してきます。善きことだけに関心を持ち、美しいことのみ

を捜し出そうとするその人の表情は、いつも微笑んでいます。そのような人の表情には優しさがあり、清潔感を覚えます。そして周りに安らぎの香りをただよわせます。

× ×  
「類は友を呼ぶ」と言われるとおり、似た者が自然に集まるようになるものです。その結果、ますますその性質と傾向とは大きくなり、悪くなる者はいよいよ悪くなり、善くなる者はいよいよ善くなって行きます。

× ×  
善いものには、悪いものは近づき難くなり、悪いものには、善いものは近づきません。互いに近づいても、知らぬ間に、それぞれが去ってしまいます。

× ×  
この世にはさまざまなもの共在ります。その一つ一つには裏もあり表もあります。暗い部分と明るい部分とがあります。しかし、それを善だ悪だと決めつけることをするよりも、それらのことやものの中から喜びを見つけ出す者になりたいと思えます。

神がお造りになったものはすべて良いものであり、感謝してうけるならば、何一つ捨てるものはありません。

— 聖書 テモテ第一の手紙四章四節 —

結局、神さまを知ることとは、どのような境遇に置かれても喜びと希望と感謝とを、そこで見出す知恵と力とを、自分にいただくということでもあります。

# みちしるべ

— 聖書 —  
教してあげなさい

## 自分を光らす秘訣

松下昌義

私たちの心や身体というものは不思議なものです。その不思議の一つは心も身体も、使う程に成長するという事です。

ただの物は、使う程に無くなっていきます。自転車の車輪についているタイヤでも、自転車を走らす距離に比例して磨滅していきます。同じことは、私たちが身につけている服やネクタイ、靴などにも言えることです。

ところが、私たちの身体は、それを使うことによって成長発達し、使わなければ退化していきま

す。歩くことをしないで寝てばかりいると、足の筋肉は痩せ衰えて、身体を支える力が無くなり、ついに、歩くことも出来なくなります。このことは、目においても言えることで、見る働きをしないで、眼帯をつけて何カ月もそのままにしておきますと、視力がどんどん弱くなっていきます。ですから、私たちの足や目の働きが弱くならないのは毎日毎日わたしたちが自分の目や足を使っているからであります。このことは、身体の他の部分についても同じであることは言うまでもありません。

ん。

このように、身体の働きを良くするためには、それらを使うことが必要なのです。特に、全身を使える「歩く」とか「走る」ということが、どのような場合にもなされ、奨励されていることの理由がよくわかります。

×

×

使うということによって成長発達するということは、私たちの「頭脳」においても同じであります。

頭脳を使うとは「記憶」をしたり、「考え」たりすることです。それが脳の神経細胞に刺激となつて、脳が活性化されると言われています。ですから、「惚けないためには頭の体操がよい」と言われるのです。

このようにして、わたしたちは自分の健康を維持し、さらに促進していく為には、「身体」や「頭脳」をよく使うことがとても大切であります。

×

×

しかし、私たちは身体や頭脳の他に「心」を持っています。そして、その「心」も、使うことによって成長していくのです。

ところが、私たちは日頃、身体や頭脳ほどに「心」の成長発達について関心をいだきません。 25

つまり身体の健康管理には一生懸命になるのに、心の健康管理には注意を向けません。その結果、心がとても健康を害して、「助けてくれ!!」と悲鳴をあげています。

それにしても、「心を使う」とはどういうことなのでしょう。それは「思う」ということです。そして「思う」ということは「思いを働かせる」ということであります。

私たちの「思い」というものは、まことに不思議なもので、それはいつも休むことなく働きつづけているものです。何も思わない、というときはほとんどないわけで、いつもいつも「何かを思い続けている」のが、私たちの生活であります。

それは、眠っている時でも夢の中で思い続けています。つまり、わたしたちは、寝ても覚めてもなにかを思い続けているのです。

このようにして、私たちの心は、自分でも知らないあいだに成長して行くのです。

ところが、問題は、その思いをどのように働かすか、ということによって、私たちの心が、良く成長したり、悪く成長したりするということです。

限度を超えた運動、暴飲暴食は必ずその人の健康を損ないます。適度な運動とバランスのとれた食事をするということが、健康を保持し且つ促進するということは、だれもが認めるところです。

こころの健康、心のより豊かな成長は、よい思いを働かせることによってなし遂げられます。よい思いとは、美しく、明るい思いです。それは、神さまに向かっている思いだと言えます。それに反して、悪い思いは、その人の心を痛め傷つけ、不健康にしてしまいます。暗くて、汚れている思いが悪い思いです。それは、神さまに背中を向けている思いだと言えます。

人から出て来るものこそ、人を汚す。人間の心から、悪い思いがでてくる。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貧欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出てきて、人を汚す。

—マルコ福音書七章二〇節—

人の心が明るく光る時、その人は輝きます。そのような自分にするのは、神さまに心を向けようとする自分の思いです。

聖書は具体的に示しています。

愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制

いつも喜んでいよう。どんなことにも感謝しましょう。悲しみのときにも、喜びのときにも、すべてを見て、知っておられる愛の神さまに、思いをいっばいに向けて祈ろう。そのとき、私たちは輝き出す。そのとき、あなたは、人を照らすことができる者となるでしょう。

# みちるベライト

よい木はよい果をつけ、悪い木は悪い果をつける - 聖書 -

## 二人は一体となる

松下昌義

十人十色と言いますが、人の性格はそれぞれに違っています。

例えば、でしゃばりで勝気、虚栄心がつよくて派手好き、好き嫌いがきつくて我がまま、そして自分を反省することなどまったくしない、という人がいます。

また、とても礼儀が正しいのですが、几帳面すぎて、まったく融通性がなく熱中型の人がいます。こういう方は大抵、直ぐに興奮して怒りだしたり責任感はあるのですが、考え方が狭くて堅苦しいところがあるものです。

さらに、他人や世間に対して無関心で冷酷、孤独で非現実的理想的な方もいます。

一方、取り越し苦労ばかりして、いつも気兼ねと焦りを感じ、自分を責めて、愚痴ばかり言っている人もいます。

そうかとおもうと、世話好きで、お人善し、社交的、おつちよこちよいで、いつも動き廻っている極めて庶民的な人がいます。

このようにいろいろな性格の傾向をみますと、つい、「〇〇さんはこれだ」などと、特定の人と結びつけてしまえますが、むしろ、自分は何のような性格傾向をもっているのかと反省してみるこのほうが大切のようです。

世間には、自分の性格について反省しようなどと、まったく思わない人もいますが、なかには、自分の性格について、とても悩んでいる人もいます。決断が出来ない。誤解を受けてしまう。うまく表現出来ない。つい反対のことを言ってしまった。自分の本当の思いが言えなくて後悔したり悩んだりする、ということがあります。

また、身近な人、例えば夫婦、親子、友達、近所の人、職場での同僚、などとの関わりで、その人の性格をどうしても受け入れられず、嫌悪感を覚えて悩んでいる人もいます。

特に、それが夫婦などの場合ですと問題はとて深刻になってしまいます。

そこで、今月は、夫婦の性格の相違と調和ということについて考えてみることにしましょう。

先ず、東京の家庭裁判所の調停委員をしておられた日上泰輔さんが経験的に出した夫婦が不適応をきたしやすい場合について、项目的に記したこ

×

×

×

×

とを、簡単に紹介しましょう。

夫婦とも支配的である場合。夫婦ともエネルギーである場合。夫婦とも悲観的である場合。夫婦が互いに相手にさまたげまな不満を持っている場合。夫婦が抱く将来にたいする希望の相違が大きい場合。配偶者のなすべき役割について、期待はずれの大きい夫婦の場合。配偶者のもっているべき性格について、期待はずれの大きい夫婦の場合。性的欲求差の大きな夫婦の場合。常時、自己中心的な性交態度を配偶者がとる場合。

× × ×  
こういうふうな項目として上げられますと、どれか一つは自分たち夫婦にも当てはまることがあるものです。「私たちの夫婦は不適応夫婦なのかしら。これは大変だ」と心配なさる方があるかも知れませんが、そのような心配は無用です。なにもかも完全に調和している夫婦などないのですから。

夫婦というものは、互いに全く違った生育環境で育つて来た者同志であります。加えて、男と女という性別もあります。ですから、互いに相違があるのが当然のことなのであります。つまり、夫婦は互いに異なった二人の人間なのである、という事実から出発して行くことが大切なのではないでしょうか。違う者同志が夫婦として結ばれるということは、それ自身理屈に合わないことです。なぜならば、違う者同志ならば結ばれるはずがないのですから。にもかかわらず結ばれた、と

いうことが夫婦というものなのです。まことに、夫婦というもののは不思議です。

× × ×  
ところが、この不思議の中に夫婦のもつ私たちに對する恵みがあるのです。それは、夫婦において、人は厳密な意味で、違った相手に出会うのです。そして、違っているにも関わらず、結ばれねばならないという神の大決定のもとに立たされるのです。

すこし、かたくなるしい言い方になってしまいましたが、簡単に言いますと、人はそれぞれが違った者なのであるということを実際に知るために夫婦となるのです。そして、さらにその違ったもの同志が、どのようにすれば互いに一つと成ることが出来るのか、という課題に身をもって答えを出すために、夫婦の生活があるのです。これが夫婦である者に与えられる神さまの恵みなのであります。

× × ×  
にもかかわらず、互いに相手を自分の思う通りの者にならないからといって不満をいだいたり、また、その為、どのように自分が関わればよいのかということに智慧を働かし努力をしないで、ただ相手を責めるばかりでは、夫婦になった恵みを、捨ててしまうことになるのです。

× × ×  
こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。  
人と妻とは二人とも裸であったが、恥ずかしいとは

おもわなかった。

―旧約聖書創世記 二章二四節―

聖書の教えは深い。夫婦が結ばれるということは「二人が一体となる」ことだとハッキリと教えています。

相違する二人、欠点も長所もその身に持っている二人が、そのまま丸ごと互いに赦し合って共に生きることが「一体になる」ということなのであります。

自分の好みで、心や身体の一部だけで交わっているのでは決して一体とは言えません。男と女とが自分の全部で丸ごと交わることが一体なのであります。

結婚することは簡単であるが、結婚を維持して行くことは難しいことである、と言われます。ましてや、その結婚を完成するということは、さらに難しいと言われます。確かにその通りです。これは、ただ結婚の課題だというに止まらず、結婚を完成するということは、人生を完成するというに通じるのです。先にも言いましたように、互いに相違する者同志が、にもかかわらず、それを一体にまで造り上げていくことは、そのまま人生を造りあげることなのです。なぜならばそのためには、多くの赦しと深い智慧と努力とがなければならぬからです。赦しがなく、智慧がなく、努力のないものは、結局、自分の身体と心の好みに合わせて生きる無能な利己主義者であります。

このことは、先に上げた夫婦の間に不適応を起こしやすい

性格傾向を持つている人の姿を見ればよく分かります。

×

×

夫婦の不和という不愉快な出来事は若い頃にも、中年の頃にも、老年に於いても起ることです。劇的に突然に起って来るといふことはそう多くはありません。「何かしつくりといかない」といふ感情の積み重ねが、ささいな事をきっかけにして表面に出てくるのです。それは出てくるべきものが出て来た、ということを知っているので、話し合っても、互いに性格の違いなどよく知っているのに、白黒をつけるようなことをしようとすると、かえって気まづくなってしまふものです。また、相手をうけ入れなければならぬことも分かっています。また、相手を手で納得がいかず、素直にうけいれることも出来ません。

このような状態になると、もつれた糸のように、どこから手をつけてよいやら、かきもく見当が互いにつかなくなってしまうものです。

そして、状態は決して良い方にはむかうことはありません。

×

×

しかし、そのような不和が表面化して来たことは、夫婦が大決断をして、互いに理屈抜きに受け入れるべき時にきていふということでもあるのです。いろいろと思ひあぐねる長い苦しい時を過ごしてきて、いよいよ大決断をして「清水の舞臺から飛び降りる」なら、事態は一変し、うっとしい気分は互いに晴れることでしょう。

夫婦の間に、自分の誇りや虚勢などは無用のものであります。また表面だけを取り繕うていてもだめです。

竹は自分が生長していく為に節目を作っていきます。その節目が竹を柔軟にして、大きく生長させ風雨に耐えさせているのです。夫婦が長い人生を共に生きていくためには、竹と同じように節目が必要ですよ。

夫婦にとっての節目とは、互いに相手を丸ごと赦し合って共に生きようとしているか、という反省をする時をもつことです。

夫婦は知らない間に、さまざまな不満を相手に対して密かにもつようになっていくものです。でも、それを隠して、表面だけ上手に取り繕って、それで良しとしてしまいます。しかし、心のなかでは、相手に対する不満をいっぱい持ち、友達との間で夫や妻のことを口ぎたなく扱き下ろすということをしてしまうものです。しかし、そのような言動は、夫婦の不和をますます大きくするだけです。悪いのは相手であって正しいのは自分なのだ、横暴なのはいつも相手であり、忍耐をしているのはいつも自分なのだという感情を、ますます自分の内に育てることになるだけです。

その結果、相手に対して尊敬も、信頼も無くなり、ただ夫婦だから仕方がないということで諦めていたり、また、相手になんの期待もせず、互いに自分の好き勝手なことをする夫婦になってしまいます。

このような夫婦は夫婦であることの祝福を何一つ自分たち

のものとすることなく、人間の持つ救いがたい悪の部分だけを自分の身のうえに現して、共に地獄のような悲しみと空しさを生きるばかりとなります。

このような夫婦を、先の竹に例えれば、節目を作らないで、背丈を伸ばした竹のようです。そのような竹は必ず折れてしまいます。

×

×

私たちは、結婚において、人が互いに違った者であることを身をもって知らしめられます。と共に、にも関わらず結ばれなくてはならない者であることを身をもって知るので、これは、結婚がもたらす神さまの祝福なのです。なぜかといいますが、総てのものはそれぞれが異なるにも関わらず結ばれねばならないのであり、それを結ぶものは、互いに赦し受け入れ、与え合う以外に無い、ということに神さまは、私たちに体得させようとなされたからです。

人と妻とは、二人とも裸であったが、恥ずかしいとおもわなかった。

夫婦の間に、誇りや虚勢などは無用なのです。丸ごと自分を素直に相手に投げ出し、相手を受け入れ共に生きようと思っただけが、違うものを一つになし、完成させるのです。イエスさまはそれを十字架上で身をもって私たちに示しにされたのです。



# みるるベイト

すべての道で神を認めよ 一聖書一

## 魅力ある人

松下昌義

「魅力」と言う言葉があります。国語辞典にたずねてみますと、「人の心をひきつける力」とありました。たしかに、「魅力」という言葉の響きや文字の形が既に、何か私たちの心を引きつけるものをただよわせているように感じるのは、私だけではないと思います。

「魅」という漢字は、「ばけもの」とか「だます」といった意味をもつ文字のようです。化け物とか騙すなどと言いますと、人間きが良くありませんが、それほど人の心を引きつける力が強い、ということを示しているのでしょうか。

チャーミングという英語の響きも何か私たちの心をひきつけます。魔法をかけるという意味にも用いられるそうです。

魅力的な人に出会うと心が楽しくなります。気分がすがすがしくなります。自分もそういう者になりたいとおもいます。

どうすれば、私たちは自分を魅力的な人にする事が出来るのでしょうか。

魅力的であるためには、「おしゃれ心」を持っていることが大切ではないでしょうか。

「おしゃれ心」とは、自分を大切にし、他人を大切にしようとする心です。

一般に、おしゃれというと、自分を飾りたてることのように思われていますが、必要以上に自分を飾りたてることは、却って、自分を卑しくしてしまいます。

「いやしげなるもの、居たるあたりに調度の多き、硯に筆の多き、前裁に石、草木の多き、人に逢いてことばの多き……」と兼好法師は「多きこと」を卑しいことと徒然草で述べていますが、そのとおりだともおもいます。それは、控え目な心、謙虚な態度、隠された愛、落ち着いた表情、周囲とのバランスの感覚の欠けていることを語っているのだとおもいます。

いやしきは行動にも現れますが、それは感覚のことであり、心情のことでもあります。

私の心が強い人、いつも不満を心の内に持っている人、柔和さの表情が無い人、心の素顔をそのまま剥き出しにしている人、なにごとくも理屈で理解しようとする人、心根が暗い人、すぐに損得計算で考える人、ユーモアがない人、一人よがりな



このことは、女性の化粧や服装だけのことではありません。この化粧の心は、男性の場合にも同じことがいえるのです。

おそらく、魅力ある男性というのは、必ず自分のすべてをそのままさらけ出す人ではなく、そのような情動を、自分自身に押し、また、相手に対して「抑制」出来る者だとおもいます。そのような男が、世間でよくいう「苦みばしたよい男」と呼ばれる者なのではないでしょうか。考えてみますと、このような魅力ある男が居なくなっていくつつあるようにおもわれます。

自分自身に対して自信が持てない男。虚勢を張っていばるだけの男。自己中心的な男。人にこび、誂うような男。そうかとおもうと、表面的な恰好よさだけをつくり、内容の空っぽな男。自分も他人をも真に大切にしようとしなくて小さく自分の世界に閉じ籠もってしまうような男などが、あまりにも多く目につくのは、わたしだけなのでしょう。

このように考えてきますと、本当に魅力のある人とはとてもすくないように思います。

本当に魅力的な人とは、おしゃれな人であり、おしゃれな人とは、自分自身を大切にし、他人さまも大切にする人であるといいました。そして、自分自身を大切にし、他人さまを大切にすることは、自分をそのままさらけ出すことなく、自分を自分自身に対して、また自分を他人さまに対して「抑制」

することが出来る深く鋭い愛と知と感覚とを持っている人なのです。

わたくしは、そのような魅力的な人を、二人知っています。その一人は、イエスさまであり、もう一人はイエスの母マリアです。

マリアさんの魅力はどこにあるのでしょうか。イエスさまの母となられたからではない。聖画に描かれてあるような美しい女性であるからではありません。マリアの魅力は徹底した神にたいする献身の姿にあります。天使から突然、受胎告知されたマリアは極度な戸惑いのうちにあつて、「わたしは神のはしためです。お言葉どおりに、この身に成りますように」と自分を全面的にゆだねました。

そして、彼女の口から、かの偉大なる讃歌が生まれ出たのであります。

わたしの魂は神をあがめ

わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。

身分の低い この主のはしためにも

目をとめてくださいました

今から後 一つの世の人も

わたしを幸いな者というでしょう。

力ある方が わたしに偉大なことをなさいましたから  
その御名は尊く

その憐れみは代々限りなく  
神を恐れる者におよびます。

神はその腕で力を振るい

思い上がる者を打ち散らし

権力ある者をその座から引き降ろし

身分の低い者を高く上げ

飢えた人を良い物で満たし

富める者を空腹のまま追い返されます。

— ルカ福音書一章四十六節 —

マリアは、信仰によって知っていました。それは、人が神  
につながり、地が天につながり悲しみが喜びにつながり、苦  
しみが希望につながり、死が永遠につながり、高ぶりと思  
上がりと不正とが神の御手の内において見つめられ、現在が  
永遠の栄光に、神にあってつながっていることを。そして、  
遂に、人生と歴史が神によって完成されることを。

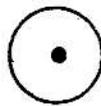
マリアの一生は、女として、母として、人としての苦しみ  
と悲しみのそれでした。にもかかわらず、神への徹底した謙  
りの信仰によって、自らおしやれをしたのです。ここにこそマ  
リアの永遠の魅力の源泉があるのです。その魅力は今日も悲  
しむ者に喜びを注ぎ、失望している者に希望を与え、汚れた  
この世を聖めつつづけています。

× × ×  
イエスの魅力は、すべての人間が引きずって生きている悲

しみと苦しみ、罪と罰の印である十字架を、自ら引き受け背  
負ってください。お姿にあります。

イエスさまは、その死に到るまで、十字架の死にいたるま  
で、徹底してご自分を与えつくして下さいました。その愛こ  
そがすべてを本当に変革させ、聖め生かす神の愛であること  
を示してくださいました。

× × ×  
自分を、本当に魅力ある者にするための秘訣は何でしょう  
か。それは、真に魅力ある者の命に感化されることでありま  
す。自分の外側だけのおしやれに、うつつをぬかすだけで、  
本当の魅力ある者の命を自分の内に迎え入れなければ、いよ  
いよこの世は卑しい者ばかりとなり、その卑しさのゆえに、  
この世は滅んでしまうでしょう。



# みちるべライト

神に従う人の魂は神の手で守られる

— 聖 書 —

孤  
独

松 下 昌 義

わたしたちは生まれるときもただ独り、死ぬときもただ独りです。人生というものは、ただ独りの戦いです。

このことは、わたしたちが自分の人生を生きて行くうえで、しっかりと知っておかなくてはならない大切な心得であります。

孤独ということを考えるとき、私は、何時も三木清と言う人が言った言葉を思い出します。

「孤独は山になく、街にある。一人の人間に在るのでなく、大勢の人間の『間』にある。孤独は『間』にあるものとして空間の如きものである。『真空の恐怖』—それは物質のものでなくて人間のものである」

×

×

一人でいることが孤独ではありません。また、見知らぬ人ということが孤独なのでもありません。むしろ、親しい人と共に居るときに、人はふと、自分の孤独を感じます。親や兄弟、夫や妻

や子供たち、さらに、親しい友達といるときこそ、人は自分の孤独を知るのです。

人の心や思いの深いところは、どれほど親しい間がらの者であっても、どのようにしても、互いに理解されることはありません。ここに人間の悲しみのすべての根っこがあるように思っています。

どのような人も、この悲しみを背負って生きています。

×

×

わたしの思いがあなたの思いとなり、あなたの思いがわたしの思いになる、と思ひ込んでいる人がいます。そういう人は、人間の孤独を未だよく知らない方です。彼は直ぐに悲しみ、愚痴り、他人を責めます。

「愛がない」「親切心がない」「わたしを理解してくれない」「わたしを訪ねてくれない」「わたしを慰めてくれない」

そのような人は、ときとして「仲良し、ごっこ」にあこがれます。また、「人間はこうでなくてはならない」と思ひ込んでいます。そして、そのよくな仲間の元にいることで安心するのですが、すぐに、「○○さんは……」といって批判をします。

×

×

人にとって、孤独は影のように何処までもついて来ます。

若い時はその孤独をまぎらわすことが出来ます。高ぶる感情によって、また、肉の内から突き上げてくるエネルギーによって、さまざまな好奇心を働かすことによって、感覚的な楽しみを得ることによって、また、将来に希望をもつことによって、さらに、目の前の仕事によって……。

しかし、それらはすべて一時的なまぎらわしにしかすぎません。孤独は時がたつにしたがって、人の内にその姿をはっきりと現して来ます。

肉体が衰え、好奇心も、知的な関心も、将来にたいする希望もなくなり、家庭においても、社会に於いてもその必要性を求められなくなった時、孤独はその人を激しく襲います。

そのとき、人は、他人に対して、自分自身が理解されることを、当然のことに期待してはならない者が人間なのだということに気付くのです。

そこでは、自分の思いの世界を、ただ独りで、噛みしめるほかに、いかなる術もないのです。その時、人は人間がこの世で生きるといふことの真相にふれるのです。

でも、それゆえに、人生は暗いというわけではありません。

孤独はたしかに、恐ろしいほどの悲しみを人間にもたらします。しかし、孤独はそれを本当に知る者にとっては、人間を一層人間へと引き上げてくれるのです。人は、自分の孤独を知る、ことよって、思いを天に向け、祈りへとみちびかれて

行くのです。

人が孤独であることは、決して悲しむべきことではありません。むしろ、悲しむべきことは、人が自分が孤独な存在であることに気付かないことでもあります。

自分の孤独についての自覚は、人を祈りに導くといいますが、その祈りは、人を深く思いやることを生み出します。笑っている人の内にも憂いがあり、喜んでいる人の内にも悲しみがあることを思いやれる者となります。また、無言の姿の内に絶叫を聞き取ることができる者となります。

神さまは、わたしたちに孤独を与えることによって、人が神を仰ぎ、祈る者となるように導き給うのです。また、人が互いにその孤独のゆえに、思いやることを持たねばならぬことを教えられますのであります。その意味で、人が自分の孤独に気付くことは、自分を孤独から救い出すための恵みそのものようにおもいます。

うるたえてはならない。おののいてはならない。  
あなたがどこに行ってもあなたの神は、共にいる。

— 聖書 —



あしがき

「命を芽吹かす」につづいて「みちしるベライト」十五、二十四号を一冊にまとめ、「いつも喜んでいなさい」と題しておとどけます。

松下先生は、私たちがいつも心の奥深くに蓄えておきたい聖書の言葉をさまざまな角度から、やさしい言葉で語りかけてくださっています。

神がわたしたちに恵みとしてお与えくださった「今日」の日を一生懸命に生きるということ。魂の居場所を持つ者の幸い。いつも喜び、どんなことにも感謝して、愛の神に思いを全開して祈ること、などなど、どのページにも、深い信仰の知恵があふれています。

この小冊子が用いられて、私たちの日々の歩みが神さまに喜ばれるものとなりますよう、お祈りいたします。

一九九三年十月三十一日

林 道 子

みちしるべ文庫 5

「いつも喜んでいなさい」

一九九四年一月十一日第二刷発行

著者 松 下 昌 義

発行所 左京キリスト教会出版部

京都市左京区下鴨南茶ノ木町二九  
電話(〇七五) 七八一―九六四〇